

漢字の使用に関する調査・研究 : 文学作品の「 現代表記」化について

著者	梅津 彰人
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	8
ページ	145-163
発行年	1983-12
その他のタイトル	A Research on the Usage of Kanji
URL	http://hdl.handle.net/2241/13485

漢字の使用に関する調査・研究

——文学作品の「現代表記」化について——

梅 津 彰 人

従来の「当用漢字表」にかわって、新しく昭和56年10月に「常用漢字表」が告示された。一般の社会生活では、できるだけこの表に従った漢字使用が望まれているわけであるが、教科書とて、もちろん例外ではなく、ひとつの規定のもとに漢字の用法が考えられているはずである。

ところが、つねづねその漢字の用法については、かなり疑問を感じるような点もあったので、今回、高等学校の国語教科書の中でも一文学作品という、ごく限られた範囲について具体的に調査してみた。以下

- 問題点の指摘
- 調査結果の具体例
- 調査結果の検討・分析
- まとめ

という順序で述べていく。

「常用漢字表」（昭和56年10月1日・内閣告示）の「前書き」の中に、

○この表は、科学、技術、芸術その他の各種専門分野や個々人の表記にまで及ぼそうとするものではない。

○この表は、過去の著作や文書における漢字使用を否定するものではない。

という項目がある。これをそのまま受け入れれば、森鷗外や夏目漱石、あるいは芥川龍之介の作品など、仮名遣いは別としても漢字については原作のままでいっこうに差し支えがないはずである。しかし、そのままでは、主として常用漢字という枠の中で生活している現代人にとっては読みづらいので、文庫本など一般向けのものについては、それぞれに漢字の用法を改め、読みやすくするための配慮がなされている。例えば、芥川龍之介の作品の場合、

「本書は、岩波版芥川龍之介全集を底本として、これを文庫編集部において現代表記に改めたものである。」(岩波文庫)

「原文は新かなづかいに改めたほか、原文の表現をそこなわない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。」(旺文社文庫)

などがある。また、新潮文庫では「文字づかいについて」という1ページを設けて、次のようにある。

「新潮文庫の日本文学の文字表記を現代的に改めるに際しては、なるべく原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

1. 口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは現代仮名づかいに改める。
2. 文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
3. 一般には当用漢字以外の漢字も使用し、音訓表以外の音訓も使用する。
4. 難読と思われる漢字には振仮名をつける。
5. 送り仮名はなるべく原文を重んじて、みだりに送らない。
6. 極端な宛て字と思われるもの及び代名詞、副詞、接続詞等のうち、仮名にしても原文を損うおそれが少ないと思われるものを仮名に改める。(これは文語文にも適用する)

第6項に該当する語は次のようなものである。

恰も→あたかも	屹と→きつと
其→その	兎に角→とにかく
迄→まで	…居る→…いる
此→この	…丈→…だけ
果ない→はかない	儘→まま
彼是→かれこれ	流石→さすが
所が→ところが	亦→また
矢張→やはり	

以上のように、各社それぞれに方針や程度の差こそあれ、いずれにしても「現代表記」にするために仮名遣いはもちろん、漢字についても手を加えて改めているわけである。その結果、各社それぞれに独自の表記法がとられ、意味やニュアンスに微妙なちがいが生じてくるということにもなってくる。

一般向けの書籍であれば、まだそれほど問題にもならないかもしれないが、これが教科書となると、また問題は別である。教科書の表記については、

「高等学校教科用図書検定基準実施細則」なるものがあり、それに従わねばならないからである。その中から直接関係のある項目だけ引用してみると、

○使用する漢字の範囲及びその使用法については、原則として「常用漢字表」による。

○誤読のおそれのある用語などには、必要に応じて読み方を示す。
となっている。当然のことながら、「常用漢字表」に対しては、一般書籍に比べてより忠実な表記になっているはずである。

しかし、同一の文学作品を採録している数種類の教科書本文を、表記法について実際に比較検討してみると、そこには相互にかなりの差異がみられ、「常用漢字表」にそれほど副っていないものもあれば、また時には「常用漢字表」に形式的に忠実でありすぎるがために、その本文がかえって読みづらくなったり、原作の内容を正しく表現しきれていないような事例もしばしばある。

以下、具体例をいくつかずつ示して、検討を加えてみたい。

調査対象として、芥川龍之介の『羅生門』を取りあげた。この作品は現行の高等学校の国語教科書に最も多く採録されているものなので、まず各社の表記法を比較するのに便利だということが大きな理由である。また、短編であること、原作では漢字がわりあい多く使われているので、調査対象となるものが比較的多いということ、などという理由もあったからである。

底本には、岩波版「芥川龍之介全集」（1982年刊）を用い、比べるものとして、現行の高校教科書「国語Ⅰ」（昭和57年度使用本）3種（**A** **B** **C**と符号をつける）と、文庫本3種（⑦ ① ②と符号をつける）を選んだ。

本来なら、漢字が使われている表現のすべてについて比較検討すべきであろうが、本稿ではとりあえず次のように範囲を限定した。すなわち、

○固有名詞については除く。

○副詞・連体詞・代名詞・形式名詞・補助動詞・助動詞・助詞、等についても、原則として除く。

ということとし、残された部分について問題のありそうな事例を取り出して考察した。現代表記に改める場合、原作で使われている漢字をそのまま使う（必要に応じてルビをつける場合も含めて）ことについては、一応問題はない。問題なのは、原作での用字法を変えてしまう場合である。すなわち、

○原作で漢字が使われているところを、仮名に改めた場合。

○原作では仮名書きになっているところを、漢字に改めた場合。

○原作で使われている漢字（常用漢字表外のもの及び認められていない音訓を用いたもの）を、常用漢字表内の漢字に改めた場合。
 などである。「原文の表現をそこなわない範囲で現代表記法にもとづいて……」
 というただし書きがされているが、実際にはどうであろうか。

以下に調査結果を列挙する。

下線をひいた部分は底本の表記。

→（矢印）の右に、教科書・文庫本等の表記を示す。

- [A]……教科書（東京書籍版）
- [B]……教科書（大修館版）
- [C]……教科書（角川書店版）
- ㊦……岩波文庫（1981・6・10発行）
- ④……旺文社文庫（1965・12・10発行）
- ㊦……新潮文庫（1982・10・20発行）

〔1〕 原作での漢字を、仮名に改めるか、それとも原作どおりの漢字とするか。

- (例1) 所々→所々[B][C]㊦ ところどころ[A]㊦④
- (例2) (丹塗りの) 剥げた→剥げた[A]㊦ はげた[B][C]㊦④
- (例3) ^{きりぎりす}蟋蟀→^{きりぎりす}蟋蟀[A][B]㊦④㊦ きりぎりす[C]
- (例4) 一通り(ではない)→一通り[A][C]㊦④㊦ ひとつとおり[B]
- (例5) 元より(固よりの意)→元より㊦ もとより[A][B][C]㊦④
- (例6) (狐狸が) 棲む→^す棲む[A][B]④㊦ すむ[C] 住む㊦
- (例7) ^{ごま}胡麻(をまいたやうに)→^{ごま}胡麻[C]㊦④㊦ ごま[A][B]
- (例8) 啄みに→^{つば}啄みに[A]㊦ ついばみに[B][C]㊦④
- (例9) 尤も→尤も㊦ もっとも[A][B][C]㊦④
- (例10) 尻を据えて→尻を据えて㊦ 尻をすえて[A][C]㊦④ しりをすえて[B]
- (例11) (右の) 頬→^{ほお}頬[A][C]㊦④㊦ ほお[B]
- (例12) ^{にきび}面皰→^{にきび}面皰㊦ にきび[A][B][C]㊦④
- (例13) 何を^お措いても→^お措いても[A]㊦ おいても[B][C]㊦④
- (例14) ^{いとま}違はない→^{いとま}違はない㊦ いとまはない[A][B][C]㊦④
- (例15) 仕方がない→仕方がない[A]㊦ しかたがない[B][C]㊦④

- (例16) 噓^{くさめ}→噓^{くさめ}㊦㊧㊨㊩ くさめ^{くさめ}㊦㊧㊨㊩
- (例17) 梯子^{はしご}→梯子^{はしご}㊦㊧㊨㊩ はしご^{はしご}㊦㊧㊨㊩
- (例18) 藁草履^{わらぞうり}→藁草履^{わらぞうり}㊦㊧㊨㊩ わらぞうり^{わらぞうり}㊦
- (例19) 鬚^{ひげ}→鬚^{ひげ}㊦㊧㊨㊩ ひげ^{ひげ}㊦㊧㊨㊩
- (例20) (赤く)膿^{うみ}を持った→膿^{うみ}を持った㊦㊧㊨㊩ うみを持った^{うみ}㊦㊧
- (例21) 高^{たか}を括る→高^{たか}を括る㊦ 高^{たか}をくくる㊦㊧㊨㊩ たか^{たか}をくくる㊦㊧
- (例22) 隅々に蜘蛛の巣^{すみずみにくもの巣}→隅々に蜘蛛の巣^{すみずみにくもの巣}㊦㊧㊨㊩ すみずみに蜘蛛の巣^{すみずみにくもの巣}㊦㊧
- (例23) 守宮^{やもり}→守宮^{やもり}㊦㊧㊨㊩ やもり^{やもり}㊦㊧㊨㊩
- (例24) 這ふやうにして→這うやうにして㊦㊧㊨㊩ はうやうにして㊦㊧
- (例25) (楼の内を)覗^{のぞ}いて→覗^{のぞ}いて㊦ こぞいて㊦㊧㊨㊩
- (例26) (土を)捏^こねて→捏^こねて㊦ こねて㊦㊧㊨㊩
- (例27) 啞^{おし}の如く→啞^{おし}の如く㊦ 啞^{おし}のごとく㊦㊧㊨㊩ おしのごとく㊦
- (例28) (臭気)に思はず鼻^{おの}を掩^{おお}った→掩^{おお}った㊦ 覆^{おお}った㊦㊧ おおった㊦㊧
- (例29) 蹲^{うずく}てゐる→蹲^{うずく}っている㊦ うずくまっている㊦㊧㊨㊩
- (例30) 瘦^やせた→瘦^やせた㊦㊧ やせた㊦㊧㊨㊩
- (例31) 大股^{おほまた}に→大股^{おほまた}に㊦㊧㊨㊩ 大またに㊦㊧㊨㊩
- (例32) 弩^{いしゆみ}にでも弾^{はじ}かれたやうに→弩^{いしゆみ}にでも弾^{はじ}かれたやうに㊦ 弩^{いしゆみ}にでも弾^{はじ}かれたやうに㊦㊧㊨㊩
- (例33) 皺^{しわ}→皺^{しわ}㊦㊧ しわ㊦㊧㊨㊩
- (例34) 嚙^かんでゐる→嚙^かんでいる㊦㊧ かねでいる㊦㊧㊨㊩
- (例35) (細い)喉^{のど}→喉^{のど}㊦㊧㊨㊩ のど㊦㊧㊨㊩
- (例36) 喘^{あえ}ぎ喘^{あえ}ぎ→喘^{あえ}ぎ喘^{あえ}ぎ㊦㊧㊨㊩ あえぎあえぎ㊦㊧㊨㊩
- (例37) (頭から)奪^とった→奪^とった㊦㊧㊨㊩ 奪^とった㊦㊧㊨㊩ とった㊦㊧㊨㊩ 取^とった㊦㊧㊨㊩
- (例38) 簪^{ひき}→簪^{ひき}㊦㊧㊨㊩ ひき㊦㊧㊨㊩
- (例39) 嘲^{あざけ}る→嘲^{あざけ}る㊦㊧㊨㊩ あざける㊦㊧㊨㊩
- (例40) 剥^はぎとった→剥^はぎとった㊦㊧㊨㊩ はぎ取^はった㊦㊧㊨㊩ はぎとった㊦㊧㊨㊩
- (例41) 蹴^け倒^{たお}した→蹴^け倒^{たお}した㊦㊧㊨㊩ け倒^{たお}した㊦㊧㊨㊩
- (例42) 這^はって行^いった→這^はって行^いった㊦㊧㊨㊩ はって行^いった㊦㊧㊨㊩
- (例43) (白髪)を倒^{さかさま}にして→倒^{さかさま}にして㊦㊧㊨㊩ さかさまにして㊦㊧㊨㊩ 逆^{さか}さまにして㊦㊧㊨㊩

原作での漢字の表記を現代表記にする場合、仮名に改めるかどうか、ということについてどう対処しているか、43例ほどあげてみた。教科書3種、文庫本3種だけであるが、これだけの中でも扱いは実にさまざまであることがわかる。それでいて、**[A]**なら**[A]**、**㉦**なら**㉦**の中において一貫した方針で通しているかという、必ずしもそうとは限らない。この辺にやはりむずかしい問題があるようである。

ただ、6種の本すべてが、次にあげる語についてはどれも漢字を用いていた。

箔 <small>はく</small>	料 <small>しりょう</small>	狐狸 <small>こり</small>	鴉 <small>からす</small>	鴟尾 <small>しぎ</small>	薨 <small>いらか</small>	火桶 <small>ひおけ</small>	逢着 <small>ほうちやく</small>	市女 <small>いちめ</small>	笠 <small>がさ</small>
採鳥 <small>もみ</small>	帽子 <small>ぼうし</small>	辻風 <small>つじかぜ</small>	飢饉 <small>ききん</small>	洛中 <small>らくちゆう</small>	侮蔑 <small>ぶべつ</small>	疫病 <small>えきやみ</small>	引剝 <small>ひはぎ</small>	往ん	
だ	鴛 <small>いしづみ</small>	黒洞々 <small>くくとうとう</small>							

これらはいずれも常用漢字表にない字、あるいは音訓にない読み方をするものであるが、表記の改めようがなかったのであろう。

さて、現代表記で書かれた6種の本文であるが、文庫本の3種**㉦****㉧****㉨**が比較的自由な漢字の扱いをしていて、それぞれの間の差異のはっきりしているのは、一般向けの書物であるということから当然のことかもしれないが、教科書の3種**[A]****[B]****[C]**の間にも扱い方に相当なちがいのあることは興味あることである。原作の漢字の用法を尊重して、なるべくそれに近い表記法をとろうとしているもの、それに対して、現代表記法の約束をできる限り適用して、それに忠実な表記法をとろうとしているものとが、はっきりしているようである。

上にとりあげてきた43例は、ほとんどの場合、常用漢字表外であるとか認められていない読み方であるとかいうことがからんでいるので、仮名書きに改めるべきか、それとも原文の漢字をそのまま使ってルビをつけるかは、まさにケースバイケースで判断をしているようである。(例37)は、象徴的なおもしろい例だと思う。老婆が死骸の頭から髪を「奪った」と、原作では表記している。この漢字の意味を生かすか、仮名で「とる」とするか、「とる」という訓のある別の漢字をあてるか、いろいろ考慮した末の結論が(例37)にあるように、ましまちに表われているのである。

他のいくつかの例について、説明をつけ加えておきたい。

(例3)の「蟋蟀せりぎりす」。常用漢字使用の目安に従えば、教科書**[C]**のように「きりぎりす」となるはずである。(例22)も、現代表記の約束どおりとすれば、**[B]**のように「すみずみにくもの巢」となろう。同様のことが(例24)でも言えよう。これも現代表記の約束に従えば「はうようにして上りつめた。」となる。いずれも仮名が続いてたいへん見にくく、読みづらいし、意味もとりにくくなってい

る。こういう表記法は原則的には正しいのであるが、約束を優先させるか実際の読み易さを優先させるかが問題である。(例3)(例22)(例24)の場合、仮名書きをしているのはそれぞれ1例ずつしかない。

次に、「極端に短い語も、仮名書きにするとわかりにくい」ということについて例を示し、実際にはどう処理されているかをみてみたい。

(例7)の「胡麻をまいたやうに」の「胡麻」。この部分を「それがごまをまいたやうに」と表記したのは教科書[A][B]の2種類だけである。(例11)の「右の頬」の「頬」。これを「ほお」と表記したのは教科書[B]の1種のみ。(例20)の「膿を持った」の「膿」。これを「うみ」としたのは教科書[A][B]の2種。同様に(例27)の「^{おし}啞の如く」の「^{おし}啞」。(例38)の「^{ひき}蔓のつぶやくやうな」の「^{ひき}蔓」。これらを「おし」「ひき」と仮名書きしたのは、それぞれ教科書の[B]と[A]の1種ずつ。また、(例41)の「^{けたば}蹴倒した」を、「蹴」という字が常用漢字表にないからということで「け倒した」と表記したものが教科書[C]の1種だけ。いずれの場合も、常用漢字表に従って仮名書きとしたものなのだろうが、実際問題として能率上からも一考を要することであろう。しかも、このような表現法をとっているのは、すべて教科書(すべての教科書がそうだということではない。)であるということは、やはり問題である。現代表記の原則に忠実であろうとするあまり、実際にはかえって読みにくい本文にしてしまっているのである。

もうひとつ、「漢字を仮名に改めると意味が曖昧になることがある。」ということについて。

(例6)の「狐狸が棲む」の「棲む」を「すむ」と仮名書きにしているのが1種ある。(教科書[C])「棲」という字が常用漢字表にないためにこう表記したのだろうが、これでは原作者が「棲」の字を使って表そうとした意味を正確には伝えられないであろう。旧表記では、ふつう「人が住む」と「動物が棲む」と書き分けられていたわけで、仮名書きではそれが曖昧になってしまう。

(例13)「何を措いても」。「措」にルビをつけるだけで「措いても」と表記しているのが教科書[A]と文庫本の②だけ。他の4種は「おいても」と仮名書きになっている。(例6)の「棲む」ほどの影響がないと考えられたのか、仮名書きが多くなっているが、やはりここは「のける」とか「さしおく」とかいう意味を、「措」という字で表したいところである。仮名書きの「おいても」では、そこまではつきり表せるかどうか疑問である。

(例19)の「^{ひげ}鬚」。この字は「あごひげ」の意である。これを「ひげ」と仮名に改めたのは教科書[A][B]の2種と、文庫本①の1種。単に「ひげ」といえば、髭

(くちひげ)・鬚(あごひげ)・髯(ほおひげ)などをさすことになる。似たような例に、「くび」(頸・首)、「あし」(脚・足)——いずれも後に別項でふれる——などがあるが、こういう語についての表記には特に留意したいものである。

(例28)「臭気に思はず鼻を掩った」。この「掩った」であるが、ここを「^おおった」と表記したのは、文庫本⑦の1種だけ。他は「^おおった」と仮名書きにしたものが教科書[A]と文庫本⑦①の計3種。「覆った」と別の漢字をあてたものが教科書[B][C]の2種である。「覆」という字をあてたことについては後の項で扱うので、ここではふれないことにして、「^おおった」と仮名書きとした場合の問題だけを指摘しておきたい。単に「^おおう」といえば、かぶせる・かぶさる・かくす・つつむ・広くいきわたる、等の意味があるが、「掩」の字は主として、かくす・さえぎる・かばう・かくまう、等の意味を表す。例文の場合は「屍骸の腐爛した臭気に思はず、鼻を掩った」ということであるから、「掩」の字の意味をやはり明確にしたいところである。

以上、原作における漢字を仮名に改めた場合、どういう問題があるかということ、いくつかの事例をあげて述べてきた。次に、これとは反対に、原作では仮名書きになっているところを、現代表記に改めるときに漢字をあてた場合の問題を考えてみる。

〔2〕 原作の仮名書きの語を、漢字に改めてある場合

- (例1) (蟋蟀^{せりぎりす}が一匹) とまってる→止まっている[C]
 (例2) (丹が) ついたり→付いたり[B][C]
 (例3) (門の近所へは) 足^{あし}おみをしない→足踏みをしない[B][C]
 (例4) (鵲^{うづ}尾の) まはり→周り[B][C]
 (例5) 飛びまはってる→飛び回っている[A][B][C]
 (例6) (夕^{ゆふ}焼けで) あかくなる→赤くなる[C]
 (例7) (雨に) ふりこめられた→降りこめられた[A][B] 降り込められた[C]
 (例8) (途方に) くれてみた→暮れていた[C]
 (例9) (雨は上る) けしきがない→気色がない[A][B]
 (例10) (雨は羅生門を) つつんで→包んで[A][C]
 (例11) うす暗い(雲)→薄暗い[B][C]
 (例12) (頸を) ちぢめながら→縮めながら[A][B][C]

- (例13) (門の) まわりを見まはした → まわりを見回した [A] 周りを見回した [B] [C]
- (例14) (足を) ふみかけた → 踏みかけた [A] [B] [C]
- (例15) (身を) ちぢめて → 縮めて [A] [B] [C]
- (例16) (梯子を) 上りつめた → 上り詰めた [C]
- (例17) (女も男も) まじってゐる → 交じっている [C]
- (例18) (屍骸は) ころがってゐた → 転がっていた [C]
- (例19) (何れに) 片づけてよいか → 片付けてよいか [C]
- (例20) (下人を) つきのけて → 突きのけて [B] [C]
- (例21) (眼の前へ) つきつけた → 突きつけた [B] [C]
- (例22) (両手を) ふるはせて → 震わせて [C]
- (例23) けはしく (燃えてゐた憎悪の心) → 陰しく [C]
- (例24) (太刀を鞘に) おさめて → 収めて [A]
- (例25) (手で) おさへながら → 押さえながら [C]
- (例26) すばやく → 素早く [C]
- (例27) 剥ぎとった → はぎ取った [C]
- (例28) (梯子を) かけ下りた → 駆け下りた [B] [C]
- (例29) (火の光を) たよりに → 頼りに [C]

以上、原作では仮名書きのところを、現代表記に改める場合に漢字をあてた事例を拾い出してみた。(例1)から(例29)まで全体を通して気づくことは、原作の仮名を漢字に改めた例の見られるのは、今回調べた6種の本文についてみれば、教科書(記号[A][B][C])だけであって、文庫本(記号⑦④⑤)には見られないということである。文庫本においては、原作の漢字についてはそれぞれの方針に従って手を加えてあるが、仮名書きの部分に関しては原作の表記を尊重して少しも書きかえてない。これに対して教科書のほうでは、常用漢字が使えところは適宜漢字に改めている。しかし、その改めかたが[A][B][C]各社必ずしも同じではない。むしろ、かなりの差がある。常用漢字の約束にできるだけ忠実に従って、漢字のあてられる部分はなるべく漢字に改めようと努めているように思われるもの([C]がこれに当たる)がある一方、原文尊重主義で原文で仮名書きのところは、なるべくそのままにしておこうとしているもの([A]がこれに当たる)もある。上にあげた例の一覧で、その傾向は明らかであろう。従って、同一の文学作品でありながらそれぞれの教科書によって表記のしかた

にいろいろな差ができ、場合によっては理解や鑑賞の上にも何かと影響を与えるということにもなってくる。

ここでも、いくつかの例を具体的にとりあげてみよう。

(例1)の場合は、虫や蝶などが「一つ所にいる」という意味の「とまる」であるが、これを「止まる」と表記すると、「進むこと、動くことを停止する」といった意味が強くうち出され、「虫がちよこんとそこにいる」という感じとは、やや違ったものとなる。もちろん、「とまる」という語そのものの表記法として常用漢字表では「止」をあててあるので、(「鳥が木に止まる」などの例をあげて)教科書〔C〕は忠実にそれに従ったのであろうが、文の前後の関係から考えると、ここに「止」をあてるのは強すぎる感じがするし、意味の上でも微妙なずれを生ずるおそれがある。

(例7)の「雨にふりこめられた」の場合も、教科書〔C〕だけは「降り込められた」と改めてある。「降り」はともかくとして、「込められた」の「込」は強すぎる感じである。同様に、(例16)「(梯子を)上りつめた」をこれも教科書〔C〕だけが「上り詰めた」と「詰」の字を使っている。この「つめる」は補助動詞的な用法であろう。(例1)の「とまる」も含めて、この「こめる」「つめる」など、いずれも単独に語そのものとしては常用漢字表でそれぞれ「止」「込」「詰」等の字があてられているのだが、常用漢字表に認められている用法だからといって、原作の仮名のところに杓子定規に漢字をあてていくということは、慎まなければならないと思う。

(例27)に、老婆の着物を「剥ぎとった」という表記を「はぎ取った」に改めた例がある。これも教科書〔C〕であるが、「剥」という字が常用漢字表にないから仮名書きとし、「とる」は「取」があてられるからというわけで「はぎ取った」となったのだろうが、「剥ぎとった」と「はぎ取った」とでは、やはり意味上の重点がちがってくるであろう。このほか、(例5)(例11)(例14)(例19)(例20)(例21)(例28)など、同じような説明のつけられる例が多い。

次にとりあげた例は、上にあげたものとはやや趣の異なったもので、表記を変えたために内容的にもずれが感じられると思われるものである。

(例6)に「(空が夕焼けで)あかくなる」とあるが、この「あかく」を、教科書〔C〕だけが「赤く」としている。この場合は単純に赤色というだけでなく、「明」の意も含まれているのではないか。「あかく」と仮名書きにすれば、その辺はふくみのある表現となるが、「赤」の字をあててしまうと限定されてしまっ

た表現となる。

(例8)の「(途方に)くれていた」。これも教科書Cだけが「暮れていた」と改めている。「暮れる」は元来、「明ける」に対する語で、「日がしずんで暗くなる」「終わりになる」の意である。この例のように「思いまどう」の意の場合には、仮名書きが適当であろう。

(例10)「(雨は羅生門を)つつんで」。この「つつんで」を「包んで」としたのが教科書A・Cの2種。「ふろしきで包む」「本を包む」などという場合と、比喩的に「雨につつまれる」「夜霧につつまれる」という場合と、ともに「包」に統一した表記でいいかどうか。後者のほうはやはり仮名書きが適当と思うのだが、教科書3種のうちの2種までが「包」をあてているところを見ると、微妙な例といえよう。

(例18)「(屍骸は)ころがってゐた」。この「ころがって」を「転がって」としたのが、教科書のC。「転がる」は「ころころ回りながら進む」「倒れる・ころがる」などが本来の意。(例18)の場合は「無造作に放置してある」意である。ここに「転」を使うと、どうしても「ころころ回る」意を強く印象づける結果となり、意味合いもだいぶ変わってしまう。

(例23)「けはしく(燃えてゐた憎悪の心)」の「けはしく」であるが、漢字の「険」に改めたものは、これも教科書Cひとつだけである。この例における「けはしく」は、「はげしく」とか「あらあらしく」などの意であるが、「険」という字からは「険しい山道」「冒険」などというように「傾斜が急である」とか「危険・困難」等の意味をまず感じとる。他の5種の本文が、いずれも仮名書きにしていることから、「険」に書きかえることはやはり抵抗があることがわかる。

〔3〕 原作の漢字(常用漢字にないもの及び認められていない音訓を用いたもの)を他の漢字(常用漢字)に改めてある場合

作品の原文に使われている漢字で、常用漢字表の表外のものすべてが改められているわけではない。仮名にすることもできず、別の漢字に書きかえることもできないものについては、どの教科書・文庫本ともに、もとの漢字をそのまま用いている。このことは本稿の初めに述べておいた。

この項では、それ以外のものについて、すなわち、原作における漢字(常用漢字でないもの及び認められていない音訓を用いたもの)を常用漢字に改めたものについて調べ、その中で特に問題のある事例をとりあげてみたい。

- (例1) 路^{みち}ばた→道^{みち}ばた[A][ア]① 道端[B][C]
 (例2) (狐狸が)棲^{すむ}む→住^{すむ}む⑦ すむ[C]
 (例3) 棄^{からす}て→行^なく→捨^{すて}てて行く[B][C][ア]①
 (例4) (鴉が)啼^なきながら→鳴^なきながら[B][C][ア]①
 (例5) 頸^{くび}(をちゞめながら)→首[B][C][ア]
 (例6) (雨風の)患^{うれ}のない→憂^{うれ}え[A][B][C]
 (例7) (人目にかゝる)惧^{おそ}のない→恐^{おそ}れ[A][B][ア]①
 (例8) 屍骸→死骸[A][B][C][ア]①
 (例9) (屍骸は手を)延^のばしたり→伸^のばしたり[B][C]
 (例10) (屍骸の)腐爛^{くらん}した→腐乱^{くらん}した[C]
 (例11) (鼻を)掩^{おほ}った→覆^{おほ}った[B][C]
 (例12) (下人の)眼^め→目[B][C][ア]①
 (例13) 呼吸^{こそ}(をするのも忘れる)→息[A][B][ア]①
 (例14) (肩で)息^{いき}を切りながら→息[A][B][C][ア]①ウ
 (例15) (鶏の)脚^{あし}→足[C][ア]①
 (例16) (話が)完^{まる}と→終^はわると[A][B][C][ア]①

まず(例1)について。「路」は常用漢字表では「みち」という訓が認められていないので、現代表記では「道」という字をあててあるのだが(6種の本文のうち5種まで)、「路」は具体的に歩^あくみ^みち^ちのことで、抽象的なことにはふつうは使わない。それに対して、「道」には歩^あくみ^みち^ちのほかにもっと広い意味があり、抽象的なことにも使われるなどのちがひがある。「みちばた」の場合には「路」のほうが本来適しているはずなのである。

(例2)の「棲」と「住」について。すでに〔1〕のところでも部分的にふれたが、「棲む」は「動物がすむ」「巣を作る」意で、「住む」は「人が一定の場所で暮らす」意である。「棲」が常用漢字表にないからといって、文庫本⑦のように「狐狸が住む」とするのは、やはり乱暴であろう。教科書[C]だけは「すむ」と仮名書きにしている。「棲む」という字が常用漢字表になくなったから、そのかわりを仮名が受け持つということになるのだろうが、動物の場合は「すむ」と仮名書きにすると決めるのもおかしいことで、曖昧さも残る。この場合は、やはり「狐狸が棲む」としなければならないだろう。

(例3)は、「棄」に常用漢字表では「すてる」という訓が認められていないので、「捨」に書きかえたものである。同じ「すてる」でも、「棄」は、「投棄」

「放棄」などというように、「投げすてる」「おきざりにする」「ほうっておく」などの意味合いが強い。「死人を持ってきてすてていく」という場合の表現としては「捨」よりも「棄」のほうが適切であると思われるのであるが、やはり漢字表の音訓に縛られてなのか、6種の本のうち4種までが「捨」に改めている。「棄」にルビをふってその字を残すか、「捨」に改めても何ら不都合はないか、じゅうぶん考慮する必要があるだろう。

(例4) これは、「(鴉が)啼く」を「鳴く」に改めた例である。「啼」には、「声をあげてなく」「鳥がなく」等の意があり、「鳴」は、「広く一般に鳥獣がなく」意を表す。「鳴く」に改めたため、意味が広くなりやや漠然となってしまうている。

(例5) これは、「下人」が羅生門の周辺を見回すときの様子を描写している部分であるが、「頸をちぢめながら」の「頸」が常用漢字表にないので「首」に改められた例である。「頸」は「のどくび」「項^{うなじ}の前の部分」で、「胴体と頭をつなぐ細い部分」のことである。伸び縮みさせたり、回したりする「くび」のことである。それに対し「首」は「かしら」「こうべ」であり、「頸」の上の頭の部分を指す。従って、「頸」と「首」とでは指し示す部分が異なるはずである。常用漢字表では「頸」を除いて「首」だけを残し、「頸」の意味をも含めた広い意味を「首」にもたせているわけであるが、意味が曖昧になる心配はどうしても残る。6種の本文のうち4種までが「首」を使っているが、教科書Aと文庫本②とは「頸」で通している。

(例6) 「(雨風の)患のない」の「患」であるが、常用漢字表では「うれえ」という訓は認められておらず、「心配」という意味の「うれえ」は「憂」という字を使うことになっている。それに従って、教科書はA[B]C 3種とも「憂え」と表記しているが、文庫本は⑦④が「うれえ」と仮名書き、②だけが「患^{うれえ}」と原作と同じ字で通している。さて、「患」と「憂」とのちがいであるが、「患」は「病気あるいは災難などについて心配する・気にかかる」つまり外から受けることにに対する心づかいの意であり、「憂」は「心をいため、思い悩む」「悲しむ・なげく」で、心の内のことについて使われる。ここの例は「雨風に対する心配」であるから当然「患」とすべきところであろうが、「患」には「カン」という音と「わずらう」という訓しか認められていないため、「憂」をあてているのである。広い意味をもたせて使っていることになる。

(例7) これも上の(例6)と同様の事情である。

「惧」は常用漢字表には入っていないが、「うたがいおそれること」「(悪いこと

が起こるのではないかと) あやぶむこと」「気づかうこと」等の意があり、この例では「人に見つかるのではないかという心配・おそれ」ということで使われている。それに対して「恐れ」は、「おそれこわがること」「びくびくしておじけること」等の意を中心として、より広い意に用い、「惧」とはだいふ意味がずれてくるところがある。

なお、文部省の『用字用語例』(昭和56年12月改定)によると、この「……のおそれがある」という場合の「おそれ」については、常用漢字表には「虞」という字があるが、標準的な書き表し方としては「おそれ」という仮名書きが示されている。漢字表に「虞」という字がありながら「標準的な書き表し方」は「おそれ」というのも不可解だが、いずれにしても「恐れ」と表記することには問題があろう。

(例10)の「腐爛」について。この語は、いわゆる『同音の漢字による書きかえ』(昭和31年7月5日・国語審議会報告)の中にあげられているもので、「腐爛→腐乱」となっている。しかし、今回調査した6種の本文についてみると、原作の「腐爛」を「腐乱」と改めたものは、教科書[C]の1種しかない。他の5種はすべてルビをつけ「腐爛^{ふらん}」としている。『同音の漢字による書きかえ』の前書きには、

「……その書きかえが妥当であると認め、広く社会に用いられることを希望するものを示した」

とあるが、この「腐乱」の場合などは、やや抵抗があるようである。「爛」には「ただれる」「腐ったり、熟したりしてつぶれる」「どろどろになる」等の意味があるが、この字を「乱」に書きかえて「腐爛」の意味——腐って、ただれること——を正しく伝えようとするのは、やはり無理であろう。

(例11) (屍骸の腐爛した臭気に、思はず鼻を)「掩った」と「覆った」とのちがいの問題である。「掩」には「かくす」「さえぎる」「かくまう」「保護する」などの意があり、屍骸のいやな臭気に対処する表現としては、「掩鼻」という語もあるように、まさに「掩」の字があたるわけである。それに対して「覆」は、元来は「くつがえす」「ひっくりかえす」の意で、他に「上からかぶせる」「ふたをする」「つつみかくす」等の意がある。調査例をみると、「覆」の字をあてたものは教科書[B][C]の2種、「おおった」と仮名書きにしたものが教科書[A]と文庫本⑦①の計3種、「掩った」と、原作の字を残してルビをつけたものが文庫本⑦の1種である。「おおう」という語については、常用漢字表では「覆」の字があてられているのだが、「覆」を使うより仮名書きにしているほうが多いとい

うことは、「掩」と「覆」との間の意味のずれということがひっかかっているからであろう。

(例12) は、「眼」と「目」との問題である。原作では、「眼」という語について

「下人の眼は、その時、はじめてその屍骸の中に蹲^{すまた}つてゐる人間を見た。」「老婆は、見開いてゐた眼を、一層大きくして、じっとその下人の顔を見守った。」

「……肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。」

等の用法が見られるが、いずれも注意力を集中させて鋭く見つめる場合である。同じ「め」でも、「眼」は「眼球」であり、「物事を見わかる能力」である。それに対して「目」は、^{まなこ}「眼」をも含めた「め」の総称であり、一般的呼び方なのである。両者にそのようなちがいはあるが、「眼」には「め」という訓が認められていないから、従って「め」という場合、漢字をあてるとしたらすべて「目」になるわけである。この例文の場合など、「目」とするとやはり、散漫な感じになることは否定できない。6種の本文のうち4種は「目」に書きかえているが、教科書[A]と文庫本⑦との2種は「眼」で通している。

(例13) と (例14) とについて。原作では「呼吸」と「息」とを使い分けている。すなわち、

「呼吸をするのさへ忘れてゐた。」(例13)

「肩で息を切りながら」(例14)

である。両方とも「いき」であるが、「呼吸」と表記した(例13)のほうでは「空気を吸ったり吐いたりする作用」に重点がおかれているようである。それに対して(例14)の「息」のほうは「吸ったり吐いたりする空気そのもの」であるように思われる。いずれにしても両者にちがいのあることは確かであるが、これを現代表記にするとすべて「息」となってしまうと、微妙なちがいは表せなくなってしまう。ただし、今回の調査の中では、6種の本文のうち教科書[C]と文庫本⑦との2種だけは、原作で「呼吸」となっているところは、それと同じ表記をとっていた。

(例15) は、老婆のやせている腕のことを形容しているところで、「鶏の脚のやうな腕」とあるのだが、この「脚」を「足」に書きかえてあることについてである。教科書の[A][B]と文庫本⑦との3種の本文は原作と同じ「脚」を使っているが、教科書[C]と文庫本⑦①との3種の本文は「足」に改めている。「脚」は「あし全体、あるいは、ひざの下から甲の上まで」のことを指し、「足」は「あしくびから下の部分」を指すのがふつうである。同じ「あし」でも「脚」と「足」

との使い分けによって、実際に意味する部分がちがってくるわけである。この「脚」と「足」との関係は、前述の「頸」と「首」との関係と同じである。老婆のやせた腕の説明ならば「脚」のほうが適切であろう。「脚」に「あし」という訓が認められていなかった*ため、「足」を「あしの総称」として用いたものと思われる。[*ただし、その後、「脚」という字に「あし」の訓が認められたので、今後は上述のような問題はなくなるはずである。]

最後に(例16)について。「老婆の話が完ると……」というところに「完」という字を用いてある。この前の部分に、老婆がつぶやくように自分の身の上のことなどを長く語っているところがあり、それを受けて「老婆の話が完ると」とある。「完る」という表現がいかにも老婆の長いぐちのような話と呼応しているように感じられる。「完」には「しはたす」「しとげる」「事を終わる」等の意味があり、この場の実感をよく伝えていると思う。もちろん、常用漢字表ではそのような訓は認められていない。当然のことながら、この部分については6種の本文のうち5種までが、「終わると」と表記している。「終」は「すむ」「おしまいになる」「あとが続かなくなる」等の意。飢え死に寸前の老婆が、喘ぎ喘ぎ、口ごもりながら自分のやってきたことや思っていることなどを、洗いざらいしゃべりつくした——そういう状態を「完る」という表記で効果を出していると思う。文庫本の㊦1種だけが「完る」という表記になっていた。原作に最も忠実ないき方の一例である。

以上、具体例を示しながらその都度検討を加えてきた。ここで簡単にまとめておく。

① 原作で漢字が使われているところを仮名に改めたという場合について

現代表記法にもとづいた表記にするためには、漢字を削減するということが大きな課題となってくる。従って漢字を仮名に改めるケースは件数としては非常に多くなってくるが、特に留意すべき点は次のようなことである。

- 形の上からみて、文の中で仮名が長く続くと読みづらくなり、印象も薄れてくる。これは一単語だけのことでなく、その前後の文の流れとしての問題である。文あるいは文節の中心にあたるところには、適当に漢字があてられているほうが読みやすい。
- 仮名にして2字くらいの(場合によっては1字のものもあろう)短い語や、複合語の中の一部などを仮名書きにすることは、かえって誤解や混乱を招くもとにもなる。

○ 漢字で書き分けないと意味がはっきりしないような場合は、仮名書きは避けたほうがよい。文の前後の流れから、誤解されるおそれの全くないときは別であるが。

② 原作の仮名書きの語を、漢字に改めたという場合について

原作で仮名書きの部分は、すべてそのまま仮名にしておくという考え方と、現代表記法にもとづいて漢字をあてられるところはすべて漢字に改めるという考え方の両極端があって、その開きも大きい。

仮名を漢字に改めると、どうしてもその漢字のもつ意味を強く印象づける結果となるから、その点の見通しをたてて原作のニュアンスをこわさないように配慮すべきである。複合動詞の一部とか、補助動詞的な語に不用意に漢字を使うと、感じはもちろん意味までちがってくるようなこともあり得るのである。

また、もとの仮名にどの漢字をあてるべきかということ。例えば「あう」に対して「合」「会」「遭」のどれをあてればよいのか。もしかしたら原作のニュアンスは、この三字のどれでもないかもしれない——等の問題がある。

常用漢字表で認められている字だからといって、杓子定規にあてはめていくようなことは慎まなくてはいけない。

③ 原作の漢字（常用漢字表にないもの、及び認められていない音訓を用いたもの）を他の漢字（常用漢字）に改めたという場合について

文学作品を現代表記に改める場合、この「原作での漢字を常用漢字内の漢字に改める」ということが、最も大きな問題であると思う。原作者が、常用漢字あるいは、かつての当用漢字の枠を一切考えずに自由に使ってきた漢字であるから、そう簡単に書きかえられるはずはない。中でも、最も多く問題になるパターンは次のような場合である。例えば「きる」「みる」という語では

切る	常用漢字では 「切る」	見る	常用漢字では 「見る」と 「診る」
伐る		診る	
剪る		看る	
斬る		観る	
裁る		視る	
截る		覧る	

などの例でわかるように、かつては意味によっていろいろ使い分けがあったの

が、常用漢字を決める際に大幅に整理されているのである。「木を伐る」でも「人を斬る」でも「切る」と表記するようになってしまうのである。前にあげた例でも、

路→道 棲→住 啼→鳴

惧→恐 眼→目 頸→首

等々、同類のものは極めて多い。こういう場合、原作の表現をこわさないようにするには慎重な配慮が必要である。

もうひとつの大きな問題は「同音の漢字による書きかえ」である。前にあげた例の中では「腐爛」→「腐乱」というのがあったが、このような方式をいろいろな語について適用していった場合、果たしてもとの語の意味を正しく伝えることができるかどうか、甚だ疑問である。

むすび

今回の調査では、「羅生門」という短い文学作品をとりあげ、現代表記化された6種の本文について漢字の扱い方にかかわる問題を拾いあげてみた。現代表記に改める場合、その漢字の扱いについては、それぞれの独自の考えによってさまざまな方法がとられていることは、上に見てきたとおりである。一般書である文庫本はもちろんのこと、一定の枠があるはずの教科書でさえも、相互に相当なちがいが見られるのである。原作の内容を正確に伝えるという点では、やはり多くの問題を抱えていると言えよう。

常用漢字表の前書きに「この表は、科学、技術、芸術その他の各種専門分野や個々人の表記にまで及ぼそうとするものではない。」「この表は、過去の著作や文書における漢字使用を否定するものではない。」などということわりがあるにもかかわらず、現実には「羅生門」のような「芸術的な、過去の著作」でも常用漢字表の枠というものを意識せざるを得ない——つまり規制を受ける——ことは事実なのである。しかも、それぞれの本文が必ずしも確固たる方針で一貫しているとも限らないのが実状である。

このようなことから考えると、文学作品の現代表記化にあたっては、教科書といえども漢字に関する限り、(よほど特殊な当て字、その他副詞、代名詞、接統詞等、いくつかのものは別として)原文の用法を尊重してそのまま用いるようにすべきではなかろうか。そして、難しい漢字には必要に応じてふりがなをつけばよいと思う。常用漢字表が「一般の社会生活において、現代の国語を書

き表す場合の漢字使用の目安を示すもの」(常用漢字表 前書き)であることに、改めて注目する必要がある。

本稿では、限られた一作品の中から具体的な問題点を列挙するだけにとどまったが、この調査を通して、漢字のはたらきについて改めて考えてみる必要があるということ、それに関しての注意を喚起することができれば幸いである。

今回の調査の中で、関連して気になったことに、漢字の訓読みの問題、漢字の書きかえの問題、熟語を仮名まじりで書くことの問題、等々のことがあるが、なお今後の課題として調査研究を進めていきたい。(昭和58年8月稿)